

事例研究

「日本薬膳学会」主催の市民講座の参加者の属性と動機

平井 聡子¹⁾, 高木 久代²⁾

1) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 救急救命学科

2) 鈴鹿医療科学大学 保健衛生学部 鍼灸サイエンス学科

キーワード： 薬膳, 市民講座参加動機, 半構造化インタビュー

要 旨

【目的】一般社団法人日本薬膳学会は、地域市民を対象とした薬膳講座や講演会を多数提供してきた。本稿では、2022年に開催された一般市民対象の薬膳クッキング講習会、薬膳講演会の参加者の属性と参加動機を量的・質的調査し実施報告する。

【方法】2022年に実施された「家庭薬膳講座（おうち薬膳セミナー）」の参加者のうち、8月21日に行われた上記の講習会と講演会に参加した35名にアンケート調査を実施した。その内の3名に対面での半構造化インタビューを実施して当講座に至った経緯を探った。

【結果】参加者は全員が女性で年代別にみると50代～70代が多かった。参加動機は、5つのカテゴリーに分類することができた。大半を占めた参加動機が「家族や自分の健康のため」と「以前より食や薬膳に興味があった」であった。インタビューでは幼少時より薬膳に親しんできた対象者とそうでない対象者に分かれ、二者は異なる動機や経緯で薬膳と接点を持ったことが明らかになった。

【考察】対象者の参加動機を踏まえ、当学会は今後も「地域市民が健康維持・促進を学べる講座」の提供を主軸に、「薬膳の知識のある市民には専門性の高い講座」と「体調不良を起因に興味が生じた市民には入門的な講座」の両輪で開催することが良策であると考えられる。

1. はじめに

本学では、日本人の食生活と健康を考慮し、2013年に一般社団法人日本薬膳学会（代表理事：高木久代）を設立した。当学会は、本学の鍼灸サイエンス学科・医療栄養学科の教員が中心となり、「東西医学を融合した新しい薬膳」の理念のもと、科学的根拠に基づいた人材育成、レシピ開発などに努めてきた。日本薬膳学会では、コロナ禍の2年間を除き、学術総会を毎年開催し（7回）、その他、学会設立の以前から2023年現在までに数多くの講座や講演会を主催してきた。

主要なものとしては、本学の学生を対象とした医療薬膳師講座（9回）が挙げられ、続いて一般市民を対象とした管理薬剤師養成講座（5回）、管理薬膳師アドバンスセミナー（4回）、健美薬膳ソムリエ育成講座（1回）、市民公開講座や講演会（30回）、コロナ禍においてはオンライン講座（2回）などを継続的に行ってきた。具体的には、2019年11月に市民公開講座「食事と心の不思議な関係」、2022年8月には鈴鹿市第5地域包括支援センター主催の薬膳健康講座において「体力づくり薬膳」のタイトルのもと、当学会が講座に携わった。

超高齢化社会の日本において、昨今健康寿命の概念の普及が進み、各地で地域住民を対象とした食育講座、ハーブや薬膳講座を実施する大学、自治体、病院が増え、人気の高さが伺える^{1) 2) 3)}。当学会主催の市民公開講座も新聞や鈴鹿市の市報などで広く周知され、毎回多くの参加者が訪れる。

本稿では、当学会が主催してきた数多くの講座や講演の中から一市民講座を事例として調査することにより、どのような市民が参加しているのかを可視化し、参加動機も調査する。また、一般市民がどのような経緯を経て、薬膳への興味を持つかというライフストーリー的な問いは先行研究がほぼない領域であるが、アンケート調査の後、対面での個別インタビューを実施することにより、量的研究と質的研究の両者の利点を生かし考察する。

2. 研究目的

1. 本研究は2022年に開催された一般市民向けの「家庭薬膳講座（おうち薬膳セミナー）」の参加者の属性と動機についてアンケート調査法を用いて記述的に明らかにする記述的研究である。
2. また、対面での個人インタビューを通し、対象者の当講座参加に至った背景や経緯をより詳しく調査し、特定する。

3. 用語の定義

薬膳：文中で使用される「薬膳」は、1) 当学会が提唱する「東洋の伝統医学に立脚した薬膳に、西洋医学における栄養学のエッセンスを加味した新しい薬膳」⁴⁾、2) 対象者がそれぞれ思い描く、定義できない「薬膳」、及び、3) 他の機関で定義される「薬膳」をそれぞれ厳格に区別せず用いる。

4. 方法論

2022年に開かれた一般市民対象の公開講座「家庭薬膳講座（おうち薬膳セミナー）」の参加者の中で、8月21日（日）に行われた「季節の食材をもちいた調理実演」（講師：村林新吾先生）「食養生について私が受け継ぐもの」（講師：王桂鳳先生）の講演会に参加した35名を対象に、性別や年齢などの基本的な属性と参加動機をアンケート調査した。（以下、本稿では「季節の食材をもちいた調理実演」と「食養生について私が受け継ぐもの」の講演会を合わせて当講座と呼ぶ。）一つの研究の中で、量的手法と質的手法を融合させることで、両者のメリット・デメリットを補い合い、単独で行う手法より大きな成果を生むとされている⁵⁾。ゆえに、対象者の中から3名に後日対面で個別にインタビューを実施した。

1) アンケート調査方法

当講座の休憩時間に15分ほど時間を確保し、紙媒体

のアンケート調査に協力してもらった。まず、書面と口頭での両方で無記名アンケートである点や強制でない旨、途中でいつでも参加を破棄できることを説明した。対象者から了承を得た後、5分程度で記入が完了するA4サイズ1枚のアンケート調査票を記入してもらい、回収した。35人の参加者のうち33人分のアンケート用紙が集まった（回収率約94%）。基本属性を問う設問は、1) 性別、2) 年齢（10年単位）、3) 居住地（市町村単位）、4) 18歳未満の子との同居の有無、5) 就労の有無と種類、6) 対象者本人の健康に関して、どの程度自信があるかを5段階評価で問うた。その中で健康に自信がない対象者にはどんな症状（肩こり、腰痛など）があるかを選択してもらった。どの設問にも、「答えたくない」との選択肢を記載した。また、自由記述欄を設け、「なぜ当講座に参加しようと思ったか」との質問に答えてもらった。本稿では、対象者（N=33）が少ないという理由から、自由記述部分に記載された参加動機のコード化はせず、対象者の記述をできるだけ原文に近い状態で短文化し、記載することにした。その後、記載内容からキーワードを拾い、カウントし、グループ分けした。

2) インタビュー方法

アンケート調査の後、対象者の当講座への参加動機を詳細かつ鮮明に探るべく半構造化インタビューを実施した。（インタビュー1回目の実施時点では、問いを参加動機だけに限定せず、内容が他の領域に広がるように実施した。）半構造化インタビューとは、インタビュー実施の前に質問する項目を明確に定めて回答を得る「構造化インタビュー」とは異なり、おおまかな質問項目は用意するが、項目を限定せず、対象者が話す内容の自由度を確保し、トピック自体も対象者が選択できうる調査方法である^{6) 7)}。本研究においても、初めに「薬膳に興味を持ったきっかけは？」という質問を提示したが、当講座への参加動機という縛りは提示せず、話の展開の流動性を重視し、インタビューを行った。半構造化インタビューの特性から、話の内容は多岐に広がったが、3名の内容を精査した結果、それぞれの参加動機と薬膳へたどり着く経緯が興味深く、その事項を本稿の第2の論点とした。それを受けて、2名には、2

度目のインタビューを依頼し、その点をより詳しく話してもらった。本稿では、対象者の回答を体系的に区分して、サブカテゴリーの分類・抽出などを行う体系的比較検討をしない。よって、内容のコード化、及び、逐語化の必要性がないことから、インタビューの録音を行わず、話を聞きながら、手書き、または、PC入力で記録した。

インタビューに参加してもらった対象者は、アンケート調査の際に、対面での個別インタビューを承諾してくれる人を別途募った。具体的には、アンケート用紙の上に名刺サイズのピンク色のカードを留めておき、インタビューを承諾してくれる人のみにニックネームと連絡先を記載してもらい、アンケートとは別の箱を設置し回収した。33人分のアンケート調査票とは別に17人がピンクのカードを提出してくれた（回収率約49%）。携帯電話番号を記載の対象者にはショートメールで、メールアドレスを記載の対象者には電子メールで連絡を取り、日程のあった3名と鈴鹿市内と津市内でそれぞれインタビューを実施した。前述の通り、うち2名には、一度目のインタビューの後の分析中に浮上してきた点をより詳しく検証するために、再インタビューを行い回答を得た。

5. 倫理的配慮

本稿は、本学の倫理審査委員会の承認（No. 492）を得て行われ、無記名アンケート調査の対象者及び個別インタビューの対象者共に、研究説明書を事前に書面で提示し、研究の意義、協力の任意性、研究への参加協力をいつでも中止できる旨を口頭でも伝えた。更に、インタビュー対象者には、インフォームドコンセントの同意書にサインしてもらった。同意書とインタビュー内容はタグ付けせず、別々に保管・記号化し、匿名性を確保した。

6. 結 果

1. アンケート調査回答結果

a. 基本属性

対象者（N=33）は全て女性（100%）で、年齢層は

50代が一番多く13人で（40%）、60代が二番目に多く11人（33%）であった（図1）。対象者の居住地は、鈴鹿市が14人（43%）と一番多く、次いで津市の10人（30%）だった（図2）。ほとんどの対象者には、同居している18歳未満の子供はおらず、子育てをしていない、または、終了していると考えられた（図3）。

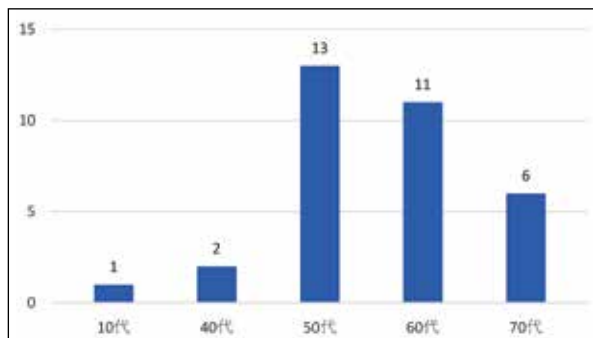


図1 参加者の年齢層

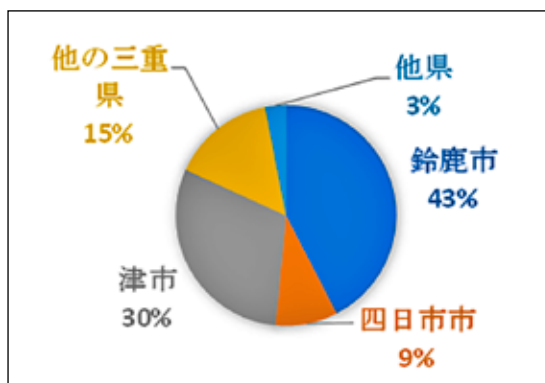


図2 参加者の住所

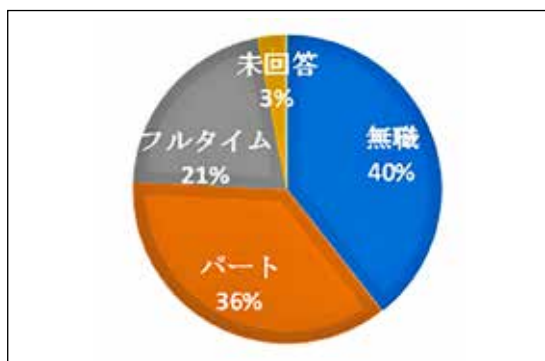


図3 参加者の就労状況

就労状況に関しては無職の割合が一番多く（40%）、パートタイム勤務（36%）、フルタイム勤務（21%）の順であった（図4）。

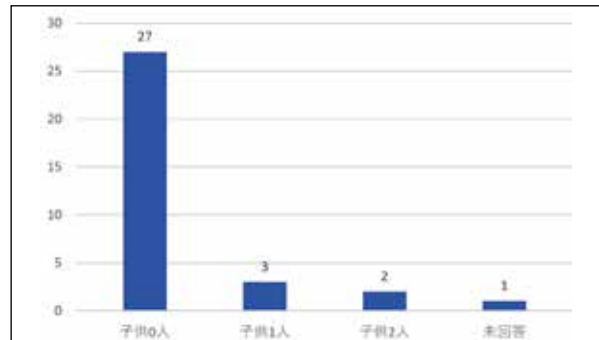


図4 18歳未満の子と同居の対象者の数

自分の「健康にどの程度自信があるか」という問いに対しては、「全く自信がない」と回答した対象者はおらず、「ふつう」と答えた人が最多（14人）であり、「非常にある」と答えた対象者も5人いた（図5）。

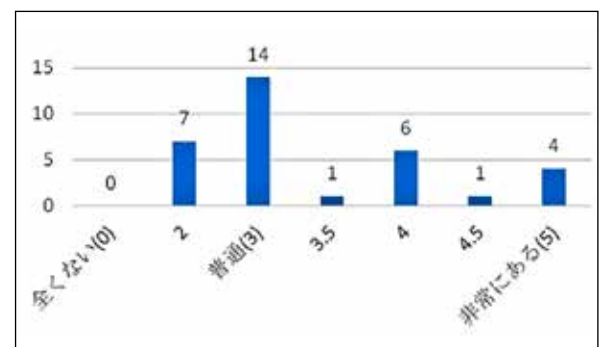


図5 健康に対する自信度

健康に自信がないため薬膳を学んで健康になりたいという対象者が多数を占めるという構図ではなく、「ふつう」も加えれば、全体的に元気な対象者が当講座に参加しているという結果が浮き彫りになった。「健康であるがゆえに当講座に参加しているのか」「薬膳に興味があるから健康であるのか」という因果関係は不明であり、本稿では議論の対象としない。

b. 参加動機

アンケート用紙の自由記述欄に記載された対象者の回答を確認し、別の対象者の内容と重複するものを除き全

て表1に記録した。記録にあたり、内容的に2つ以上の動機が一文に含まれる場合、「表1」のどの枠組みに記載するかは著者が主観的に判断した。「表2」の参加動機の延べ人数のカウントは、「表1」の記載箇所に関わらず客観的、かつ厳密に行った。また、対象者の回答（複数可）を記録する過程で、重複のため「表1」に記載しなかった回答も含めた。それらの動機を仕分け集計した結果、次の5つに分類できた。回答の延べ人数が多かった順に「家族や自分の健康のため」（20人）、「もともと食に興味があったため」（11人）、「イベント性・講師との繋がりによる動機」（8人）、「仕事にいかすため」（5人）、「普段の食事に取り入れるため」（3人）であった（表2）。一番多かった「家族や自分の健康のため」という回答をした20人うち8人は、家族または本人が体調を崩した経験があった。

2. インタビュー回答結果

事例1. (Aさん)

始めにインタビュアーが「当講座に至った動機、経緯などを話せる範囲でできるだけ詳しくお話してくださいますか?」との問い掛けをして、対象者の話す内容が自由に展開していくことを促しながらインタビューを進めた。Aさんは、「医食同源」という言葉が好きで、物心がついた幼い頃から体調を崩すと祖母などから「いわゆる自然療法を受けていた。」と切り出された。そして、とても生き生きとご自身が経験されてきた西洋の薬を使わない自然療法の例を語ってくれた。例えば、口内炎が出来た時は、ゆで卵を作る際にできる透明の膜を傷に貼り付けていたことや、短大に通っていた頃に火傷した時は、患部に豚の皮を張り付けたことを話してくれた。最近、職場のストレスから体調を壊し、「薬膳を食べたい!」と言う気持ちが高まっていた頃、偶然にも鈴鹿のケーブルテレビで当講座のことを知り、受講に至った。また、白いご飯のおかずになるような薬膳料理を教えてほしいとも言及された。小さい頃から梅を積極的に取り入れた生活を送っており、インタビューの最後に、Aさん自身が漬けた梅酒を渡してくれた。

事例2. (Bさん)

2番目のインタビュー対象者からも、子供の頃から「医食同源」という言葉が好きという話が聞けた。両親と母方の祖母の食に対する意識が高く、正月の準備は秋のハゼ釣りから始まること、幼稚園の頃から山で山菜を取り、干し柿も作る生活だった。14歳頃にはテレビを通して「医食同源」という言葉を知り、関係書籍を購入するほどだった。

大学・大学院は農学部へ進み、農業と植物生理の研究をしていた。プライベートでも世界中の食養生への興味を持たれていた。ヨーロッパ、中東諸国、旧ソビエト連邦諸国、アジア諸国の料理本を収集し、現在も各国の伝統料理を研究されている。また、当学会主催の管理薬膳師の資格者である。

更に、江戸時代の日本食やインドやスリランカのアユルバーダー、中世ヨーロッパの修道院での料理レシピなどを含め、古くから世界中に食養生の概念が存在し、現在の薬膳へと受け継がれていることに非常に興味を抱かれている。例えば、柑橘類の皮から作られるピールは欧米諸国で食されているが、これはアジア諸国で生薬とされている陳皮と同じ効果が期待されると語られた。また、大航海時代にヨーロッパ諸国が世界中から集めていた香辛料の中には、現在も漢方薬の原料として使われているものが多数存在することに触れ、これらの事象からも「薬膳は、世界中の食文化の中に根付いている。」と熱心に語られたのが印象的だった。

インタビュアーの「薬膳に接する際、漢方の分野を目にする機会があったと思いますが、漢方への興味は目覚めましたか?」という質問には、「漢方は薬なので、薬として服用するのではなく、普段の食事が薬になるという考えの薬膳の方が良いです。」と発言された。物心ついた頃からいわゆる薬膳に触れてきた中で薬膳講座の通信講座も探していたが、高額であったこと、時間的に余裕がなかったことから薬膳の勉強は保留にされていた。そのような折、市報で当学会の薬膳セミナーを知り参加し、その後、管理薬膳師の資格取得、今回の講座参加へと繋がった。Bさんからは砂糖少なめで無添加の手作りイチゴジャムをいただいた。

表 1 当講座になぜ参加しようと思ったか？（自由記載）

1. 家族や自分の健康のため ・実父と祖母をガンで亡くしており食事には子育て中もできるだけ野菜をとるようにしたり気をつけてきたし、興味もありました。産後は漢方薬も調合していただいたり、相談させて頂いてきた薬剤師の方もいて薬膳には自然と興味がわきました。(60代) ・夏になると体調を崩す主人のために何かできたらと思いました。(50代) ・娘（現 34 歳）が生まれてアトピー性皮膚炎と言われて食を見直し、母（大正生まれ）の食にもどったのが良く今では健康で昔ながらの日本食を食している。(70代) ・薬膳講座をずっと受講していて、食改善をして徐々に健康になってきているから。(50代) ・今は体調が良いが、小さい時から病弱でアレルギーもあるのでこれから先、食に気をつけたいと思い、以前、薬膳を勉強したこともあり今回参加しました。(60代) ・母が病気になり同居して介護していました（1年半ほど）。余命宣告されていたので少しでも長生きしてほしいと薬膳のことを学びたいと思い参加しました。(40代) ・5 年程前から膝関節が痛く、杖なしでは歩けなくなり、整形、鍼灸治療をしていました。この大学での市民講座にきて、薬膳をしり、興味を持ち参加しました。(70代) ・老夫婦が当たり前前の生活ができるように食生活に気を付けたい！(70代) ・薬や病院に行くより、食べる物や身近なもので改善、予防したいと思っていたところにこちらの講座を見つけました。(60代) ・義父が大病を患い食欲不振などもあり私に何か出来ることはないかと思ったのがきっかけです。(50代) ・転職後、職場の人間関係の悪さから食欲がなくなり気力も低下し、眠れなくなった。その時にハーブティーを飲むようになった。だったら漢方・薬膳も体にいいのでは？と思った時に新聞で募集されていたのでとびつきました。(40代) ・薬膳師の受講生（4 年前）で今一度勉強したかったから。受講生になったのは、体調をくずしている人があまりにも多く、欧米化の食事を見直してもらいたかったから。(60代)	2. 元々、食に興味があったため ・20 代の頃から食に興味があり、先日受講させて頂いた薬膳の講座で今日のことを知り参加しました。(50代) ・食に興味があり、薬膳は薬のイメージだったが薬膳弁当をいただいて、美味しかったので勉強して健康になればいいと思い受講しました。村林先生の講座を受講したかった。(50代) ・食に関心がありローフードやヴィーガンなどを経験したがしっくりこなかった。薬膳の考え方に納得できる点が多くあったため。(60代) ・飲食店経営でもともと食に興味があったため。(50代) ・食べることに興味があり、それがどのように役立つのか知りたかった。(60代) ・子供の時から医食同源に興味があり、仕事は別の道に進みましたが、食には非常に興味があります。レシピ作家をしています。美味しくて体にいい物を食べて生活したいため薬膳の勉強をしています。(50代) ・子供が生まれてから食生活に興味があり、マクロビオティックや無農薬野菜等を試みていた。高齢者の介護相談に関わる仕事をしており、きちんとした食生活をしている方は元気であること、食生活が変わることで身体だけでなく精神面も関係することがあり食は大切だと思ったため。(50代)
---	---

3. イベント性・講師との繋がりによる動機

- ・高木先生と旧知の仲で、講座を勧められ、管理薬膳講座、アドバンスコースを受講。高校家庭科の教員もしていたので、興味が深かった。(70代)
- ・シェフの料理を久々にいただけるのを楽しみにしていた。(50代)
- ・村林先生の講座だったため。こちらの薬膳も過去に受けていたので。(70代)
- ・コロナも緩和して久しぶりにお勉強とリフレッシュがしたいと参加した。(60代)
- ・華流ドラマがすきで中国の雅な王室の衣食住が好きでという不純な動機もありました。(60代)
- ・村林先生と薬膳のコラボでしたので、是非参加したいと思いました。(50代)
- ・高木先生との出会いで薬膳に関心があり勉強を始めた。(70代)

4. 仕事にいかすため

- ・調理、栄養関係の仕事に興味があり、その中の薬膳について詳しく知りたかったため。(10代)
- ・経営している飲食店でもこのようなものを取り入れていければと思い参加した。(50代)
- ・飲食業をしています。健康維持の食事メニューや提案ができればと和薬膳の勉強をさせていただき、とても参考になっています。(60代)
- ・和食の飲食店をやっています。今年1月7日七草粥が好評で毎月2回朝粥モーニングをしています。粥に合うメニューを探していた。(60代)
- ・年に3～4回、薬草・薬膳講座をやっています。人間は心と体がリンクしていて、両方が健全でなければ、健康とは言えないと思っています。そのためには、まず食事からだと思って参加しました。(60代)

5. 普段の食事作りに取り入れるため

- ・普段の食事作りに薬膳の考え方をとり入れたいと考え、先の講座を受講しました。(50代)
- ・薬膳の効能を理解して、庭や自然に生えている草花を日々の食事に利用したいと思ったから。(50代)
- ・毎日の料理に生かしたい。(70代)

表2 参加動機（複数回答による延べ人数）

1	家族や自分の健康のため	20人（うち8人は家族や本人が体調を崩した経緯あり）
2	もともと食に興味あったため	11人
3	イベント性・講師との繋がりによる動機	8人
4	仕事にいかすため	5人
5	普段の食事作りに取り入れるため	3人

事例 3. (C さん)

C さんは 2016 年まで、2 人の子供を育てながら通勤に 1 時間以上かけ、大手 IT 企業でフルタイム勤務をしていた。日々過大なプレッシャーのかかる職務の中、夫も単身赴任になり、徐々に食べ物の味が感じられないという症状を発症した。最終的には、20 時に帰宅すると子供がストーブの前で寝ていたことが引き金になり、悩んだ結果、退職を決意した。その後、非正規で働いた職場で人間関係に悩まされ、不眠になり、朝食が食べられなくなった。腸の調子も悪くなり、自律神経失調症のような状態でもあった（当時は「プチ鬱では?」と自己診断していた）。

その際、インターネット検索などで、不眠にはカモミールが良いと知り、不眠系、ストレス系、婦人系、美容系などのハーブティーを多数購入した。不眠の解消を願うというよりは、リラックス効果やおまじない的な要素を期待してのことであった。そして、それまではコーヒーを飲んでいましたが、職場にもハーブティーを入れた水筒を持参するようにした。当初ハーブを試した理由は、スーパーなどでも目にする機会があり身近だったためであるが、使用するうちに「ハーブは西洋由来の自然療法であり、それなら東洋由来の薬膳や漢方でも良いのではないか。」という発想が「ふと」生まれたと言及された。このハーブから薬膳・漢方への興味の展開は、何かのきっかけがあった訳ではなく、「ふと」という言葉がぴたりくるような自然発生的なものであったと回想していた。そのような折、2021 年に新聞で当学会の薬膳家庭料理講座を知り受講。次にオンデマンド講座に参加し、今回の受講に繋がった。漢方に関しては、スーパーでティーバックのようなものは目にしないので、手軽さがなく難しいイメージがあったため手が出なかったとのことだった。

7. 考 察

本稿は、2013 年より 10 年間続く一般社団法人日本薬膳学会主催の一市民講座に絞って研究した。参加者の属性に関する結果から、当講座は三重県在住の 50 代以上の女性に支持を受けていると考えられる。参加動機に

関しては、「薬膳＝健康に良い」という構図が社会一般に浸透しており、健康維持・促進のためとの動機が主要動機であることは予測されたが、多くの対象者が「もともと食や薬膳に関心があった。」との主旨の記述をしていたことは興味深かった。そのような対象者は「食べること」を生活の重要課題に位置付けており、このような対象者の存在が当学会の講座や講演会のニーズに繋がっていると考察される。

また、インタビューを通して 3 名という少人数ではあるが、対象者一人一人の育ってきた環境やライフコースが違っていて、それぞれが異なる経緯で同じ薬膳講座にたどり着いた過程を探ることは興味をかき立てられた。3 名中 2 名は、同じ「医食同源」という概念に惹かれており、その 2 名とも若い頃より自然に触れる機会が多く、祖母などの影響も受け、以前より薬膳的な食生活を送っていた。反対に、1 名は都会の IT 企業に勤めており 2 名より年代も若く、体調を崩すまでは薬膳という概念を意識する生活はしておらず体調不良をきっかけに薬膳との接点が生まれたと言う点が関心を引いた。その点、家族や本人が体調を崩したあと薬膳に興味を持った人が多く見られたアンケート調査結果とも一致していた。

最後に、「もともと」の家庭環境により薬膳への興味が幼少時より芽生えるケースと体調を崩した際などに関心が湧く 2 つのケースの存在を踏まえて、当学会は、今後も地域市民が健康維持・促進を学べる講座の開催を第一の目的に据えながら、「すでに知識や深い興味のある市民には専門性の高い講座」を「体調不良を起因に興味が生じた市民には入門的な講座」を継続していくことが大切であると考えられる。

謝 辞

当講座の休憩時にアンケート用紙を記入してくださった方、インタビューに協力を表明してくださった方、そして、お忙しい中インタビューにお越しくださりライフストーリーを語ってくださった 3 名の方に心より感謝申し上げます。また、本学の保健衛生学部鍼灸サイエンス学科の浦田先生には、当学会のこれまでの講座・講演資料をご提示い

ただきありがとうございました。

助 成

本件研究は助成を受けず実施され、また、利益相反も存在しない。

文 献

- 1) 安田智子, 加藤陽治. 地域住民を対象とした「食育・健康講座」が受講者に与えた効果. 東北女子短期大学 紀要. 2020; 59: 39-47.
- 2) 高橋恵子, 菱沼紀子, 石川道子, 山岡栄里, 大久保菜穂子, 松本直子, 他. 看護大学が市民に提供する『ランチタイムミニ講座&ミニコンサート』の意義と特徴. 聖路加看護学会誌. 2008; 12 (2): 80-90.
- 3) 野依智子. 「働く意欲」をつくる. 「働く」を考えるー実践事例集ー. 2018; 4-7.
- 4) 「おいしい YAKUZEN であなたも健康に!」[Internet]. 鈴鹿：一般社団法人日本薬膳学会；2020 [cited 2023 May 5]. Available from: <https://www.jsmd2013.jp/about/>
- 5) 高橋都. 保健医療における質的研究：半構造化インタビューを用いた研究の実践. 日本保険医療行動科学会年報. 2000; 15: 105-114.
- 6) 近藤敏夫. インタビュー調査の技法：現象学的社会学の具体的応用. 佛大社会学. 2009; 34: 1-13.

- 7) 森浩美, 嶋田あすみ, 岡田洋子. 研究報告思春期に発症したがん患者の病気体験とその思いー半構造化面接を用いて. 日本小児看護学会誌. 2008; 17: 9-15.

ー プロフィール ー

平井 聡子 鈴鹿医療科学大学保健衛生学部救急救命学科・助教 博士（社会学）

〔経歴〕1999年カリフォルニア州立大学大学院サクラメント校社会学部修士課程修了, 2005年ハワイ大学大学院社会学部博士課程修了, 2013年名古屋大学非常勤講師, 2017年 鈴鹿医療科学大学非常勤講師, 2023年より現職。〔専門〕医療社会学, 比較社会学, 女性のウェルビーイング。

高木 久代 鈴鹿医療科学大学保健衛生学部鍼灸サイエンス学科・教授 博士（医学）

〔経歴〕2012年～現在 日本薬膳学会代表理事, 2015年三重大学大学院医学系研究科博士課程修了, 2022年～現在 鈴鹿市文化振興事業団理事長, 2023年～現在 鈴鹿医療科学大学副学長。〔専門〕医療英語, 薬膳学, 東洋医学。

Demographics and Motives of Citizens Participating in the Japanese Society of Medicinal Dietetics

Satoko HIRAI¹⁾, Hisayo TAKAGI²⁾

1) Department of Emergency Medical Science, Suzuka University of Medical Science

2) Faculty of Acupuncture and Moxibustion, Suzuka University of Medical Science

Key words: Medicinal Dietetics, Public lectures, Semi-structured interviews

Abstract

Aims: This research aims to explore the demographics and motives of individuals who attended a public lecture on medicinal dietetics hosted by “Japanese Society of Medicinal Dietetics”, utilizing both quantitative and qualitative methods.

Methods: The study surveyed 35 participants during the intermission of the lecture using a questionnaire. This was followed by face-to-face private interviews with three subjects.

Results: Questionnaire results revealed that all participants were female, with the majority being over 50 years old. Motives were categorized into five groups. The most frequently mentioned motive was to promote their family’s or their own health. The second most mentioned motive was an original interest in food and medicinal dietetics, which was supported by the interviews.

Conclusions: It is suggested that the Japanese Society of Medicinal Dietetics should offer both advanced and fundamental lectures, catering to individuals who have long been interested in healthy eating as well as those who have recently encountered the concept of medicinal dietetics due to personal illness or that of family members.